日本文學史要說

武田祐吉

日本文學

文學博士 武田祐吉 著

富士

昭和二十五年一月二十日　印刷
昭和二十五年一月廿五日　發行

定價　一五〇圓

日本文學史要說

著者　武田祐吉

東京都千代田區神田小川町三ノ一〇
冨士出版株式會社
發行者　代表者　森北常雄

東京都品川區東品川四ノ七四
協榮印刷株式會社
印刷者　代表者　植松義夫

發行所

東京都千代田區神田小川町三ノ一〇
冨士出版株式會社
電話神田(25)二六一六、三〇六八
振替東京二九四四

日本文學史要說

武田祐吉著

凡例

一、本書は、新制大學、新制高等學校の學習用として新に編纂いたしました。

一、本文は新かなづかい法に依り、參考として引用した古典の部分は、歴史的かなづかいを保存しました。

一、文中、作品の名稱には、太字を使用しましたが、その必要の無い場合には太字にしなかつたものもあります。

一、紀年は西暦を使用しました。

昭和二十三年十月

https://www.kotenbunsyoshoku.com www.kotenbunsyoshoku.com

目次

第一章　序　說……一
一、文學史の意義……一
二、時代の區分……八
第二章　古代の文學(一)——概說……九
一、文學の種類と代表的作品もしくは作家……九
二、概說……一〇
第三章　古代の文學(二)——各說……一五
一、祭詞……一五
二、神話・傳說……一八
三、物語……二二
四、日記・草子……三三
五、史傳・說話……四七

六、和歌・歌謠……五〇
第四章　中世前期の文學(一)——概說……六七
一、文學の種類と代表的作品もしくは作家……六七
二、概　說……六七
第五章　中世前期の文學(二)——各說……七三
一、物　語……七三
二、隨　筆……八三
三、謠曲・狂言……八七
四、短　歌……九九
五、連　歌……一〇四
第六章　中世後期の文學(一)——概說……一〇五
一、文學の種類と代表的作品もしくは作家……一〇五
二、概　說……一〇六
第七章　中世後期の文學(二)——各說……一一五
一、假名草子……一一六

二、浮世草子……一一六
三、黄表紙・洒落本……一二一
四、合卷・讀本……一二三
五、滑稽本……一二七
六、人情本……一二九
七、淨瑠璃……一二九
八、脚本……一三三
九、短歌……一三六
一〇、歌謠……一四一
一一、俳諧・俳文……一四一
一二、狂歌・狂文……一五一
一三、川柳……一五三
第八章　近代の文學(一)――概說……一五四
一、文學の種類と代表的作品もしくは作家……一五四
二、概說……一五五

第九章　近代の文學(二)——各說……一六六
一、小說・文學評論……一六六
二、脚　本……一八八
三、新　詩……一九〇
四、短　歌……二〇三
五、俳　句……二〇五
第十章　結　語……二〇六
日本文學作品年表……二〇九

日本文學史要說

第一章　序說

一、文學史の意義

文學史は、社會史、經濟史、政治史、美術史、宗教史等と並んで、文化史の一部門を成し、人類の文化發展の跡を探り、人類生活の進歩に寄與しようとする學問である。これから學ぼうとする日本文學史は、廣い世界文學史の一部分であつて、全人類の文化の歷史に、日本人の作り出した文學作品がどのような役割を果したかを明らかにし、更に將來に向つて、いかにして輝かしい文學を創作すべきかを考える爲に、大切な基礎を與える學問である。

文學史の方法。文學史研究の對象は、文學作品である。その作品の作者、作られた社會、後世への影響、作品そのものの價値、これらの一々がよく調査され判斷され、評價され、それからそれらの作品を種類に依つて分類し綜合して、一の體系を組織し、その間の史的展開を考究する。これには勿論

種種の困難が伴う。研究者の文學を感受し批判する能力に應じて、作品の扱い方も變つてくるし、更に研究者の史觀の相違による見解の相違、また文學論、演劇論、詩論等の素養如何にもとずく文學の本質の理解の深淺によつても、價値判斷の相違が生じる。なほその外に、それを整理し敍述する方法の點にも困難がある。このような次第で、日本文學史の完成には、今後なお多くの研究と、その發表整理とが必要である。

この書では日本の文學史上に現れてくる作品と作家の中から、一般に主要な存在と認められているものに重點をおいて、順次考察を加える。現代に於ける我等の精神生活に不斷の力を與える立派な作品を取上げて、これを味讀することによつて、我等の祖先の偉大さを知ると共に、その缺點をも探り將來すぐれた文化を建設する爲の土臺としたいと思う。

二、時代の區分

本書では、時代を、古代、中世、近代の三に分つた。古代は、古代國家から律令國家の時代で、いわゆる大和時代、および奈良平安時代に當り、文學の中心は、宮廷の貴族にあつた。中世は、封建社會の時代で、鎌倉室町時代と江戸時代に當る。文學の中心は、鎌倉室町時代には、宮廷貴族および武家僧侶にあり、江戸時代には、町人を主とする一般民衆にあつた。このように文學の所在が相違し、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

また記事も多いので、今これを前期後期と分けることとした。この後期は、近世の名で呼ばれることもある。近代は、資本主義社會の時代で、明治時代以後を言い、文學の中心は一般民衆にある。この時代區分には種々の說があつて、たとえば平安時代の後半、美術史の方で藤原時代とも稱している藤原氏の攝關政治時代以後を、中世封建時代に入れる見方もある。今は一番簡單で大きな區分に從つた。これによつて、日本文學の史的展開の大觀は指示されると思う。

第二章　古代の文學(一)——概說

一、文學の種類と代表的作品もしくは作家

祭　詞——延喜式祝詞

神話・傳說——古事記、日本書紀、風土記

物　語——竹取物語、伊勢物語、源氏物語

日記・草子——土佐日記、枕草子、蜻蛉日記、紫式部日記、更級日記

史　傳——大鏡、榮華物語

說　話——今昔物語集

和　歌――萬葉集、古今和歌集、和泉式部、曾根好忠、藤原俊成

歌　謠――梁塵祕抄

二、概　說

日本人も、極めて古い時代から、祭詞、歌謠、神話、物語のような文學を所有していたであろう。しかし今我々が知ることの出來るのは、漢字を使用するようになつてから記し留められたものばかりである。氏族制度の時代から、大化の改新を經て、律令制度による體制を整えた大和の朝廷の人たちは、漢字を使つて、今まで傳わつて來たものを整理し記し留めた。奈良時代（七一〇から七五年間）の初めにできた**古事記**、**日本書紀**、**風土記**は、その整理には當時の新しい解釋がはいつてはいるが、歌謠、神話、物語の傳わつたものとしては、一番古いものである。これに後れて九二七年に書物となつた**延喜式**に收められている祝詞を加えて、最古の日本文學の一般をうかがうことができる。これらは美しい情熱的な詞章に富み、原始的狀態からある段階にまで到達した宗教思想を含んでいる。現世に對してあかるい氣もちで生を樂んでいた日本人固有の生活狀態から生れた文學である。哲學的な思索には乏しいが、現實の社會組織を背景として、その上に相當の想像力が働いている。

このような文學は、人々の共同製作である性質を有しているが、これはやがて時代の推移と共に、

個人の創作を尊重するように展開して行つた。文學は、初めは實生活と密接な結びつきを持つていたのであるが、やがて實生活を離れて文學が存在するようになつた。文字の無かつた時代には、祭詞は唱えられ、歌謠は歌われ、物語は語られて傳えられた。このような傳承の時代にも、前から傳えられたものを唱えるだけで無く、そこには新しいものも加わつて行つたであろう。しかしそれを誰が作つたかは、あまり問題にされずに傳えられてゆく。歌謠のような形のものには、誰の作だと傳えることがあつても、それは正確に傳えられることは困難で、傳說的なものだと考えてよいのである。

漢字がはいつて來てから、人々はこれを使つて漢文を書き、續いて日本文をも書くようになつた。それは帳簿書狀のような實用の方面から始まつて、次第に文學にも及んだものと考えられる。このようにして書かれた文學は、初めの間は、口で唱えられるものと何ら變るものでは無かつたが、やがてそれは分れて別のものとなつて發達した。文學意識が確立したこと、創作を重んじるようになつたこと、作者に注意するようになつたことなどは、そのおもな現れである。

口誦によつて傳えられた數々の祭詞、神話、傳說、歌謠の類は、漢字を使用して、次々に記錄され整理された。やがて祭の庭や酒宴などで吟唱された歌謠の外に、個人的な創作の歌も生れ、家々に歌の記し留めが作られ、それらの統合された大きな歌集も成つた。これは主として漢文學の影響によるものである。大化の改新前後から、漢詩漢文も作られて居り、萬葉集の中にも漢詩漢文が記載され、

奈良時代の末には、漢詩の集も作られた。かくして漢籍の影響を受けた內容の歌は、佛教の知識によつて作られた歌と共に、相當に多く見られるに至つた。漢籍や佛教の素養を持つ宮廷の貴族や官吏たちによつて、古代文學の高峯である萬葉集の歌は作られた。萬葉集の歌の作られた年代は、かなり廣く、初めの傳說歌謠の時代を除いても七世紀から八世紀の半（七五七まで）に及んでゐる。その間には萬葉の歌の完成者として偉大な足跡を殘している柿本人麻呂（七一〇年頃歿）を初めとして、貧窮のような社會的現象を歌の上に取扱つた山上憶良（七三一歿）、傳說の詩人として知られる高橋蟲麻呂など、個性のある歌人も少く無かつた。それらの宮廷に仕えた官吏である人々の歌の中に交つて、庶民の歌ともいうべき少數の民謠風の歌も見出される。歌謠の形式も整備され固定して、長歌、旋頭歌、短歌の三體となつたが、旋頭歌まず亡び、長歌も次いで衰えて、短歌だけが續いて殘つて行つた。

奈良時代の末から平安時代の初めにかけて宮廷は唐の文化に心醉した。唐の制度を直譯式にまねた律令が宮廷生活の基準であつた時代、宮廷における公私の宴席に歡迎されたのは漢詩であり唐の音樂であつた。男子は漢學を學び漢字を使用して漢詩漢文を作ることに全力を盡していたが、漢字は字數が多く字劃繁雜で使用に不便があり、殊に日本語を書くに適していなかつたので、これに代るべき文字として平がな、片かなが發達した。平がなは女子の間に盛に使用されるようになり、これによつて歌が詠まれ、文章が書かれたが、それも初めのうちは、男子の餘技ともいうべき性質のもとに見るべ

き文學が作られた。**竹取物語**、**伊勢物語**のような物語、**土佐日記**のような日記、**古今和歌集**のような歌集などはそれである。しかしやがて女子の間に、立派な文學が作られるようになり、**源氏物語**のような物語、**蜻蛉日記**、**和泉式部日記**、**紫式部日記**、**更級日記**のような日記、**枕草子**のような草子の類などが、次々に書かれた。これらの作者たちは、ほとんど全部宮廷に出入する下級官吏である受領階級の娘で、攝政關白として政治を執つている藤原氏出身の后妃たちに仕える女官であつた。描き出されているのは宮廷の狹い情趣の世界であつた。女性的な感性の鋭敏な筆致でいわゆる物のあわれを寫す。凡百の事物をすべて情趣の世界に入れようとする。そこでは佛教があこがれや救いの對象として扱われ、佛事が氣安めの催しとなる。淨土とはまさにこの世界であつた。かくして現實を直視することが避けられる。それは又榮花の極限に達した宮廷貴族が、その經濟の基礎である莊園の崩壞と新興階級の武士の興起によつて、次第に沒落しかゝつている時代の宮廷人一般の人生觀と趣きを一にする。この女性的な感性の世界はやがて崩壞直前の宮廷の男性を引入れ、その結果の現われが**新古今集**の幽玄にして艶なる歌體となつた。

歌はこれらの女子とこれに接する男子との間に交される社交上の機關となり、機智を爭い情熱を盛る用具として流行した。歌合のような遊戯性に富む行事が常に催され、題を設けて作り詠むことが盛になつた。勅撰和歌集は度數を重ねて古今集以後室町時代に及んで二十一代集の名を殘した。平安時

代の初めには在原業平、小野小町のようなすぐれた抒情詩の作家があり、中頃の和泉式部は、この系統を受け繼いだが、それに次いでは清新な叙景風の歌人として、曾根好忠が現れ、末期に及んで、自然のうちに詩情を見出そうとする藤原俊成、西行等を見るに至つた。これはやがて來るべき中世初頭に於ける新古今の歌風に接續するものであつて、社交の具たる性質を離れて純文學の本質に立ち歸つたものである。

歌謠は、口誦されるものと文筆によるものとに分れたが、口唱されるものは、庶民の間に行われて自由な形態を採つて庶民生活の實際を描寫した。その平安時代初期のものを、宮廷の人たちが取りあげて歌いものとして固定させたのが、神樂歌、東遊（あずまあそび）、催馬樂（さいばら）、風俗（ふぞく）である。文筆によるものは形式が限定されて短歌のみとなつたが、その短歌も、もとは實際に歌われものであつた。それが平安時代に入つて、完全に文筆作家の歌の形式として固定したのである。口誦される歌謠は、七五調四句の今樣その他の雜藝と呼ばれるものが行われた。これらの口誦歌謠を集めた梁塵秘抄は、今は一部分しか傳わつていないが、それに收めた歌謠は、今樣と短歌とであり、共に佛教關係のものが多いが、一部には庶民の間に行われたと思われるものがあり、それらは庶民の生活によれるものとして生き生きとした性質を持つている。

平がなが、女子の手に使用されて立派な文學を作るに役立つた一方には、片かなは、僧侶および漢